

第
四
編

西
田
長
壽

西田長壽（にしだ たけとし）

明治三十二年三重県に生れる

昭和四年慶応義塾大学経済学部卒業

明治新聞雑誌研究家

著書 「天野為之」「明治時代の新聞と雑誌」

「明治時代の新聞雑誌記者略伝」（編）

第一部 再建への胎動

第一章 マイナスの時点

一 取引先の遭難・得意先の喪失

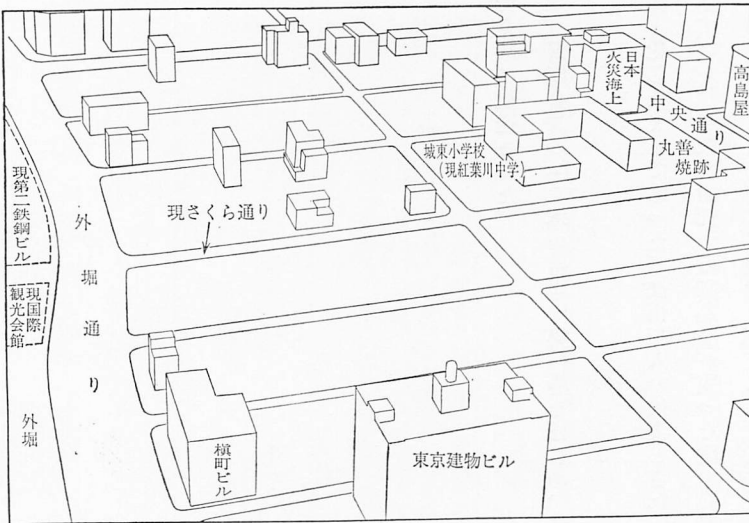
昭和二十年八月十五日正午、終戦の詔勅がラジオを通じて全国に放送された。

当時及びその後数年間の日本社会の一般状況は、たとえば、筑摩書房の「日本の百年」第一巻をはじめ、多くの良書に委しておきたい。

ところで、本店の本拠地、日本橋通の両側は、無残な廢墟と化したままであった。江州商人の代表とされた、日本橋詰の西川蒲団店も、高島屋横の近江屋伴伝も戦災で焼けていた。当社の向側では高島屋が残った位で御茶の山本山も焼けていた。当社の側も、日本火災海上、旧区立城東国民学校（現中央区紅葉川中学校）、川崎信託株式会社



日本橋附近の焼跡（松浦総三所蔵 提供「週刊朝日」）



社（現日本信託銀行本店）を残してみな焼けてしまった。

その両側の舗道には時に古道具や日用品をならべた臨時の大道商人が店を出していた。使えるものならなんでも売れる時期であった。近江屋伴伝でも、柳屋でも暫くしてから仮屋で店を細々と始めた。いずれも当社が木造ながら本建築をしていた頃であったろうか。本社が疎開させられた京橋角の第一生命保険相互会社分館（京橋ビルディング株式会社）の周囲もまた概ねそのような状況であった。

次に、横浜、大阪、神戸、仙台も爆撃による火災で、同地にあった支店・出張所など壊滅の状況であった。横浜では当社発祥の場所も定かでなくなった。無事な支店は京都、札幌、神田のみで、名古屋は幸いにも軽微な損害で済み、また長崎も原子爆弾攻撃を受けたが一部の被害に留まった。

これらの地域に住居し、戦災を受けたり、疎開させられた社員の苦痛は、しばらくおこう。

どうしても、書いて置きたいのは、本店および各支店・出張所が多年、好意と支援を受けた御得意の方々の遭難であった。戦中、戦後に没くなられた軍人、在学中、意ならずも剣をとらされたまま帰らなかった学徒兵、その中には当社の顧客は数え切れぬほど多かった。更に直接戦争にかかわらなかったとしても銃後を守る人々の中にも戦災で家財をなくされ、同時に多年愛蔵の図書・美術品をなくされた顧客も多かった。すべて当社にとって、眼に見えない損失であった。

一つの例を挙げよう。

昭和四十四年十一月十一日満九十三歳で喪くなられた長谷川如是閑氏は、明治二十年代からの顧客であったが、

そのとき以来、本店ならびに大阪支店で求めた何万巻の蔵書を、昭和二十年五月二十四日の空襲で失われた。そのことを「学鑑」（昭和二十七年一月号）に寄せた「丸善と私の六十年」で述べている。

惜しいのは、さきに記した、初めのころ丸善で買った本をつめた本棚を焼いたことだ。大阪へ行っても、その本棚は、その後につくった立派な本箱よりも大切に、中野の書庫でも別扱ひにして鎮座させてゐたのである。内容は「丸善社史」にあげられてゐる同店初期の洋本の類や、古典の廉価本など平凡なものだが、外にそのころ英国で出た“Criminological Series”（犯罪学に関する各国の著書の叢書）の揃ひや、アメリカの犯罪学の本も可なりあって、フランス、イタリー等で出た犯罪に関する著書で、そのころまでに英訳されてゐた本の殆んど全部があつた。内容より私の思ひ出として惜しいのである。それらの初期の丸善本と、その後の私の丸善からの書物とを併せて見ると、明治の半ごろから今日に至るまでの、丸善扱ひの文化科学に関する洋書の変遷の見本のやうでもあつたので、丸善のためにも惜しむべきである。

それは、十日余りも、火山のように白煙を吐いていたとも、また当時時価として三十万円はすると評価されたと述べている。

話は少し横にされるが、長谷川如是閑は、当社からいろいろの犯罪関係の洋書を買ってそれを参考にして「罪人の研究」と題する長論文を書き、これを陸羯南や三宅雪嶺、古島一雄らが筆陣を張っていた「日本」に投書した。その掲載は同紙明治三十六年四月二十六日から同年七月十二日まで六〇回続いて完結した。古島一雄にこれが認められて「日本」に入社、それから六十余年のジャーナリスト生活が始まったのであった。

穂積重遠博士の御宅も昭和二十年三月九日の空襲で罹災されて貴重な蔵書の大部を失われたが、当社としては、博士の先考陳重博士以来の顧客であり、当主重行氏に至るまで三代つづいての顧客である。慶応義塾塾長であった小泉信三博士も罹災された。これも先考信吉以来の顧客であった。早稲田大学教授の本間久雄博士や柳田泉博士も、五月二十四日の戦災に遭われて、貴重な蔵書を焼かれて了った。柳田博士の場合には春秋社の「世界名著解題」の資料や、明治の翻訳小説とその原本の揃ったものを全部焼かれて了った。これだけは再び揃えることができないと、罹災後、長嘆されていた。

このような例は各地に多かった。

顧客へのマイナスの影響は、そのみには留まらなかった。昭和二十一年の新円切替や財産税の徴収の影響も大きかった。仙台支店などでは月々百円を下らぬ舶来化粧品を買われた老舗の未亡人や舶来の服地でしか服を仕立てられなかった病院長なども、一時は、その経営に苦勞するという事情に置かれた。これらのことで当社も本支店を通じて顧客の維持獲得ということには相当苦勞せざるを得ない事情が続いた。

勿論、当社としてもそれほど豊富に手持商品などあるわけもなく、古い顧客の満足を得るとともに、若い人達をひきつけるような商品は全くなかった。それがあゝの意味で当社復活待望の動因となったのかも知れぬ。

二 巨額な外国債務の残存

次に記さなければならぬのは外国出版社・商社に対する莫大な額の負債がそのまま残っていたことである。こ

これらの負債の決済に苦勞した司 忠現会長はその著「学燈をかかげて」の中で次のように記している。

丸善としては戦前からある海外の取引先に未解決の大問題が残されていた。旧債の処理である。私どもは戦前には、為替の上り下りがあるから、いつでも外貨債を持っていた。うちの場合も米貨債十五万ドル、仏貨債は五十万フランといったぐあいであった。

これらの外貨債は戦争中に政府の命令で全部供出させられてしまった。ところがこれらは為替の高低ということより、いつも海外の取引は借越しになっているから、補償の意味で外貨債を持っていたのである。だから戦争が終わってみると、借金だけが残ってしまった。取引きの再開とともに、当然のように海外から旧債の請求を受けたわけである。

それを計算してみたら、なんと、何億という膨大な額になった。とても、払えたものではない。資本金六千万の会社など、この交渉の成行き如何ではその日のうちにも吹っ飛んでしまうという、まるで時限爆弾のような難題をかかえていたのだ。

当社の前途の多難知るべしであった。

三 店 舗 被 害

戦争中、空襲によって受けた本支店、出張所、工場等の被害は、本書一、〇五八頁に記されている通りである。重複を恐れず再記すれば、まず東京においては本館、第一・第二・第三別館、昭和別館、文具倉庫、文具別館、角

倉庫、早稲田出張所、日暮里工場、荏原工場の建物も設備も全焼していた。

残ったのは神田駿河台下の神田支店と、丸の内ビル一階の出張所、駒込工場ばかりであった。

国内の支店・出張所については前述した通りであった。

海外の支店・出張所・工場は後述のように戦争中の被害はなかったが、戦後接收によって全施設とともに営業の糸口もなくなってしまったのである。

まず挙げたいのは、京城支店、新京出張所、奉天工場の消滅事情である。それらの事情について昭和二十六年版「丸善社史」の記述を参考にして記しておく。

京城をはじめ朝鮮各地では戦局がすすみ且つ日本軍の敗色が漸く濃くなったころから、反日分子の動きが活発になってきていたが、終戦とともに反日派の活動は愈々活発となり、京城においても、朝鮮人住宅地区に接近している邦人の住宅・商店などでは朝鮮人による暴行や掠奪による被害が各所に起った。

京城支店は市の中心部に在ったため何等の被害もなかったが、このような情勢に鑑みて営業の継続が危険であると考え、ただちに店を閉じ内外との取引及販売を一時中止するとともに、諸物品の整理と未収入金の回収に努力した。当時は、諏訪多支店長が昭和十八年十月病歿ののち、福岡支店長齋藤哲郎が京城支店長を兼ねていたが、そのときは福岡に在って指示をすることも出来なかったし、指図を受けることも殆んどできなかった。職員も徴用や召集で減少していたが、残留社員のうち年長であった江口良雄が支店長職務を代行していたのである。

すでに内地とは通信連絡はできず、一方、日本の軍部や総督府からも何等の指令もなく、社員は全く途方に暮れ

つつあった。そのうち九月八日、米軍が京城市内に進駐してきたため、人心も次第に静まり、不安も薄らいだが、そのような状況の中で、近く在鮮日本人は、全部本国へ送還されるということも確かになったので、送還後の当支店の管理を朝鮮人社員裴渉（京城府立高等普通学校卒業後、昭和十二年十一月当支店に採用、のち選ばれて社員資格の待遇を受けていた一人で、いま一人社員待遇の朝鮮人も居た）に委任することとなり、九月下旬米軍当事者立会の下に店内の諸物品を棚卸して現物並に帳簿を整理し、支店と裴渉との間に、管理委任に関する契約書（米軍当事者サイン）を取交わした。そして八月以後、このときまで復員帰社してきたものも含めて、全支店員に対して九月、十月分の給料を支給した。

間もなく、当支店の取引銀行であった第一銀行京城支店は、米軍の指令で一切の払出しを停止されたが、このため約四十万円の預金も封鎖されて了った。

支店が裴渉に委した当社の財産・商品も、第一銀行京城支店の預金も、その後如何に処分されたかは知るよしもない。それにしても給料だけでもよく支払って置いたものである。その後の支店社員の生活は文字通りの竹の子生活であったが、これらの社員は、日本軍京城連絡所の指令によって、同年十月下旬漸くその大部分の引上げを行うことが出来た。のちの大阪支店長関正文もその中の一人であった。

新京出張所は昭和十五年四月に開かれた。新京特別市梅ヶ枝町一丁目一二番地ノ二に事務所をおき、売店を同市大同大街東京海上ビル一階と、豊楽路においた。昭和十九年初め頃の出張所の従業員は邦人二十二、三名（内女子

四、五名)、満人十七、八名(内女子六、七名)計四十名内外であった。この年から昭和二十年にかけて男子社員は次々と現地召集となり、終戦直前には邦人は男子では病臥中で召集を免除されていた一青年(伊藤慶治・現地で死去)のみで他は女子であった。そのため営業は振わず、そのうえ仕入れも出来なくなってきたので、単に手持商品を売っていたに過ぎなかった。

終戦を知ると同時に、前記伊藤が、社宅の家族たちを指揮して銀行や得意先に集金に廻らせたが、時すでに遅く、いずれも支払を中止していたため徒労に帰した。

そのような状態のところへ、終戦直後、ソ連軍が進駐してきて、海上ビルを接収したため、当社売店も接収されて了った。しかし十日ほどでソ連軍が撤収すると、直ちに中国第八路軍、次いで間もなく中国中央軍が進入してきて、両軍の間に市街戦が展開された。豊楽路売店も七発の銃弾を受けた。市内住民は一步も戸外に出ることも出来ず、不安と恐怖のうちにその日を過ごした。しかしそれも数日で終わり、市内も穏かになったが、海上ビルも当社の事務所も共に中央軍に接収された。

そのような中へ、応召中の数名の社員が、前後して帰所し、また、所長の稲葉安之助も八月二十八日に復員してきた。

稲葉は豊楽路売店が未接収であったので、かねて親交のあった中国人林鈞宝の斡旋で、表面経営者を刘増仁とし丸善の看板を取りはずして北辰書局という屋号に改めて、営業を続けることにした。営業を続けるといっても、取扱商品は古書が主であったが、稲葉所長が次のような英文語学書数点を、自らタイプ印刷したものを販売して現金

書名	部数	単価	頁数
English Conversation.	一〇〇部	一部 一五円	八五
Present-Day English Reader. BK I	一〇〇部	二〇円	一一〇
Present-Day English Reader. BK II	一〇〇部	二五円	一二〇
Arabian Nights "Ali Baba."	一〇〇部	二五円	八〇
Vice of Love.	一〇〇部	一〇円	八五

収入の道を講じた。これも林鈞宝の助言があった。林鈞宝は中国人で、早稲田大学・明治大学に学び、日本語にも堪能で誠実な人であった。

右のように苦心活動をして見ても、所詮は永続し得ないことは明白であり、本国との連絡も杜絶し、四囲の情勢は、全く予断を許さない状態であった。

そこで稲葉所長は、独断で出張所の解散を決定した。同時に満人をも含め従業員全員にそれぞれ解散手当及給料を支給し、邦人に対しては帰国旅費として金二千円を渡した。この際、稲葉所長、波多野豊三、原田四郎、高木卓二、上野好郎、小山喬男、関谷文男らは解散手当の受領及身元保証金返還を遠慮している。

解散後、社員とその家族は、各自居住地区毎に集団する邦人団体に加



新京出張所長 稲葉安之助

わり善後策を講じていたが、物価は暴騰に次ぐ暴騰で、生活は急速に苦しくなり、ために中には露天商を営み、或は食料品の売買に従事し、或は日雇稼ぎに出るなど、日々を凌ぐのに精一杯で、たとえようもない艱苦を嘗めた。これは、何も当社社員に限らず、満州及び中国各地に在留した本邦民間人のすべてが経験したことである。このような不安の日々がつづいていたが、とかくするうちに送還輸送船に便乗を許され、昭和二十年十月末頃までに大部が引き上げてきた。

いま一つ満州における当社の奉天工場（工場長・大屋部資治）は、昭和十七年春、インキを現地で生産して販売するために設けられたもので、終戦時の主任は海賀信彦であった。ほかに数名、作業指導のため内地から派遣されていたが、昭和二十年に至って社員は殆んど現地召集され、製造不能に近い状態に陥ったため、遂にインキの製造を中止し、専らストック品の販売に従事していた。この方は終戦後、間もなくソ連軍に接収されて了った。

当社が、インドネシアのジャカルタに、ジャカルタ書籍店を設けた次第は、本書第三編において述べた通りである。

いま、敗戦によって、それらの設備や商品は連合軍に接収されることとなった。すでに、昭和十九年十一月頃からは、内地との連絡は絶えており、従って内地出版物は全く入荷しない状態で、そのうえ、一方では売掛金など回収出来ないものも生じた。また当時、ジャカルタ書籍店の手持現金は二六万円あったが、その金額の中から未払金合計一〇万円を支払い、残金一六万円を、南方開発銀行に予入し、借入金返済に充当した。終戦時の銀行負債は

約九五万円あった。この負債は、終戦直後、軍票回収を軍から求められたため、当社に払下げを受けた商品の売立を数日に亘って行い、その益金で全額を返済した。ボゴールで鉛筆工場として借入れていた家屋は、インドネシア人に直接引渡した。

終戦直後、現地での連合軍への引継は、特に厳正確実に行った。ために連合軍及び現地日本軍当局から賞讃の辞を受けた。

ジャカルタ書籍店で使用していた社員に対しては、現地人・日本人の差別なく、昭和二十年九月末日までの給料全額を支払い、現地人は解雇した。日本人社員は、すべて收容所に入れられた。この人々は民間人であったから、各々の希望から二つのグループに分れて自ら管理運営しつつ強制労働に服した。そして日本選送に当っては、ごく少量の身廻品のほかは、所持の貨幣も、何もかも取上げられた。

ジャカルタに出向した当社社員は佐久間庸等九名であったが、これらの社員は昭和二十一年二月二十二日、ジャカルタを出発、五月十二日以降順次に日本に帰着、復社した。